

2020

令和2年10月10日発行（毎月1回10日発行） 通巻326号

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

とあまおう



さわやか福祉財団

TAKE YOUR OWN THINGS

『NEXT ～心と心をつなぐ工夫と取り組み～』

動画配信中！

新型コロナウイルス感染症拡大により、多くの住民主体の活動が休止、または再開を躊躇しているという声が聞こえてきます。一方で、会えないからこそ助け合い活動の必要性は高まり、「コロナと共生する暮らしの中で、何ができるか」を地域の皆さんで協議し、そこから生まれたさまざまなアイデアや工夫を凝らした活動も始まっています。

このような活動を紹介するために、当財団では、「NEXT 心と心をつなぐ工夫と取り組み」と題する動画を制作しています。第1弾は奈良県生駒市、第2弾は静岡県袋井市の活動です。

コロナ禍の中でも心と心をつなぐ活動のヒントとして、実践に、そして生活支援コーディネーターの皆様は勉強会などに、ぜひご活用ください。

動画は、当財団ホームページでご覧いただけます。

<https://www.sawayakazaidan.or.jp>

厚生労働省の特設サイト「地域がいきいき 集まろう！通いの場」からもご覧いただけます。

下記アドレスのトップページから「交流」をクリックしてください。

<https://kayoinoba.mhlw.go.jp/>

〈奈良県生駒市〉



〈静岡県袋井市〉



◎第3弾動画は10月中旬リリース予定。どうぞお楽しみに

さあ、言おう

2020年10月号

CONTENTS

2 新しいふれあい社会 実現への道

「共感」と「寄り添い」

アルフォンス・デーケン氏の言葉から

清水 肇子

4 特集 コロナ禍を乗り越えて共生社会へ

SNSの活用、新しい支え合いのあり方——
埼玉県内の工夫と取り組み

10 「地域助け合い基金」 状況のご報告

12 応援ありがとうございます！

「地域助け合い基金」助成先のご紹介

14 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から

地域がワンチームとなって

高齢者の買い物支援と通いの場を創出 (佐賀県嬉野市)

22 看取り・終末期を考える 裏を見せ、表を見せて…

絵描きになるか地雷除去か

中年で人生にスイッチを入れる 尾崎 雄

新しいふれあい社会づくりに向けて

● 新地域支援事業・

助け合いの地域づくり

26 北から南から 各地の動き

● その他の財団の活動 など

30 ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・ご寄付者の皆様のご紹介

32 さわやか活動日記（抄）

⑨「地域助け合い基金」ご寄付のお申込みについて／⑩「地域助け合い基金」助成応募のご案内／⑪『さあ、言おう』8月特別号のご紹介／⑫『さあ、やろう』vol.13のご紹介／⑬『助け合い大全'19』のご紹介／⑭みんなの広場／投稿募集／⑮さわやかパートナー・『さあ、言おう』のご案内／表紙絵から

助け合いを広げよう！ 新・ひとりごと ● 澤岡 詩野

「共感」と「寄り添い」 アルフォンス・デーケン氏の言葉から

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

上智大学名誉教授・カトリック司祭のアルフォンス・デーケンさんが、亡くなられた。

今でこそ日本で「終活」という言葉が普通に使われるようになったが、日本において「死と向き合うこと」の大切さを社会にわかりやすく説いてくれたまさにパイオニアの方だ。デーケンさんが「死の準備教育」の必要性を提唱し始めたのは、今からおよそ半世紀も前になる。その後、終末ケアやホスピスの普及にも尽力された。いずれも提唱した当時は、まったく孤立していたとご本人も述べている。今、それは日本社会の考え方のスタンダードになりつつある。

私自身、もう30年近く前のことだが、公開講座に2度ほど参加したことがあった。私はクリスチャンではないが、その後、一度だけ直接個別にお話をうかがう機会を頂戴した。大学の聖イグナチオ教会を訪問し、それから氏の案内で構内の一室に通してもらった。

「死をタブー視せず、自ら向き合うこと」、デーケンさんの深い提言は、自身の育った時代背景とも大いに関係している。ドイツに生まれ、まさしく命がけでナチに抵抗した少年時代。ご自身が死に直面してきた慟哭や悲しみの体験をどのように人生のプラスにできるのか。なぜ様々な逆風の中で日本という場を選び続けてこられたのか、これからの高齢者やその身内にとつ

て、さらには若い世代がどう学ぶべきなのか、ある身近な人の死についての相談を含めて、氏ご自身の経験を踏まえてお話をいただいた。具体的なお考えやその辿られた道については多くの著書に譲るが、デス・エデュケーション^{死の教育}は、同時に毎日をいかにより良く生きるかを考えるライフ・エデュケーションであり、これからの高齢社会では、高齢者自身はもちろん、若い頃から学ぶことこそに意味があると強くおっしゃられた記憶がある。

数十年前の、限られた時間の光景が、今でもしっかりと脳裏に残っているのはなぜなのだろう。思い返すことでまた心が満たされるのはなぜなのか。浮かぶのは、話の内容はもとより、その時間、しっかりと自分を受け止めてくれたという安心感だと気づいた。取材や相談が山のようにある中で、若い一訪問者にも真摯に向き合ってくれたその姿にこそ、大きな答えがあった。自ら受け止め、考える力をその穏やかな佇まいが与えてくれていた。

相手を認める「共感」と「寄り添い」。支援の基本の姿勢として、今認知され始めている。どんなに総合相談の仕組みや窓口ができて、それが機械的であれば人の心には響かない。自ら頑張ろうと思う気持ちは、その人を心から思ってくれる姿からこそ引き出せるものではないだろうか。そこに地域のお互いさまの助け合いの意義がある。

どれほど生きがいがある人生を送れるかがますます重要になること、高齢になつてのボランティア活動がその生きがいになること、学生のうちから社会体験を積める仕組みが必要なることを当時から明快に説いてくださった。しかし、それでも人間なのだから必ず失敗はあり、それを素直に認めてユーモアで笑い飛ばすことで温かな人間関係が生まれ、豊かな未来につながる一步になると言われる。人生100年時代の道標として、改めてかみしめていきたい。

特集

SNSの活用、 新しい支え合いのあり方 —— 埼玉県内の工夫と取り組み

フェイスブックで
コロナ禍で奮闘する地域活動を紹介

埼玉県社会福祉協議会

埼玉県社会福祉協議会では、コロナ禍を受けてフェイスブックに「シャキたま生活支援コーディネート活動紹介」のページを作成。同ページでは、埼玉県内の生活支援コーディネーターの取り組みや協議体の様子を投稿してもらい、地域活動等の情報を発信している。こうし

た情報発信は活動者にとっても参考となるが、活動を推進する生活支援コーディネーターにとっても、今後のヒントやモチベーションアップにつながっている。投稿された内容は、実にさまざまだ。

（文／新地域支援事業担当リーダー 岡野 貴代）

例えば、協議体委員が無償で提供した畑に作物を植える活動。3密を避けるために活動を屋外とする傾向が広まってきたが、畑に人が集まることで集いの場となり、収穫した作物をフードパントリーやフードバンク、地域



食堂等の活動団体へ寄付することで、活動促進やネットワークづくりにもつながっている。

感染対策を行って再開した活動も出てきているが、そうした他団体の対策も参考となるだろう。ある住民主体の体操教室では、重りと名札を1人ずつファスナー付きポリ袋に入れて保管することで、重りを使い回さない工夫がされている。

ウェブを活用した活動も広まっている。保育園と大学生とのオンライン交流会の投稿もあった。大学生という若い世代の感性を生か

して、ウェブのカメラを巧みに使ったクイズや、宝探し、一緒にダンス、自作絵本の読み聞かせなど盛りだくさんの楽しい様子が報告されている。絵本にはパソコンならでは、動いたり色が変わったりといった演出がされていたとのこと。新しい交流会のモデルとなるのではないだろうか。

ほかに、オンラインを併用した協議体開催の様子なども投稿されており、会場のレイアウトや実施内容などいろいろな工夫が、会議主催者にとっては非常に参考となる。

「協議体通信」等を訪問して配布することによる見守り活動なども投稿されている。通信の内容も、生活支援コーディネーターや活動者の応援メッセージ、筋トレや免疫力アップのための食事情報など、それぞれ特色がある。

コロナ禍において、どのように住民主体の活動を進めるのか、すべての人が悩みながら試行錯誤しているからこそ、こうした情報プラットフォームを事務局側が構築することは、生活支援コーディネーターや活動者にとって大きな支援となる。

代わりとしてできること、
変わずにできること
新しい支え合いのあり方を考える

埼玉県三芳町

新型コロナウイルス感染症が拡大して以降、埼玉県三芳町でも、「今できる支え合い活動」として、新しいつながり・支え合い活動のあり方を考え、実践してきました。今までの活動の代わりとしてできることは何か、変わずに続けられることは何か。その工夫と取り組みを紹介します。

(編集部)

三芳町

コロナ禍での新しい支え合い・つながりづくりのポイント

- 「3密回避」と「感染予防」を徹底してできることを考える
- 無理をしないで、できることから前向きに取り組んでいく
- オンラインを取り入れて新しい「つながりの形」をつくる
- 「屋内」から「屋外」でできる活動も取り入れる
- ちょっとでも家から出かける「用事」をつくる

こども・大人食堂の代わりに子どもたちに昼食配布

コロナ禍でこれまでの「こども・大人食堂」が開催できない状況が続き、また、お祭り等のイベントも中止となる中、少しでも子どもたちを笑顔にし、保護者の負担も軽減しようと、夏休み中に子どもたちへの昼食配布を実施しました。

「こども・大人食堂を始めて半年、やっとできてきた高齢者とこども・親世代とのつながりがコロナで切れてしまうのは悲しい」という高齢ボランティアの思いから始まった弁当配布。子どもたちへの連絡は、育成会役員を兼ねるメンバーがSNSを使って行い、一気に集まらないよう、地区別に受け取り時間を設定しました。「子どもの笑顔を見ると元気が湧いてくる」と皆さん大張り切り。「この前のカレーおいしかった!」「次は唐揚げが食べたい!」と子どもたちの評判も上々です。今後も、月に1回は昼食配布を続け、コロナ



禍でもつながりを切らない活動を進めていく計画です。

サロンの代わりに屋外でラジオ体操

これまで行われてきたサロン活動など、室内に多くの人が集まる活動に代えて、「外で・短い時間で・間隔をあけて」できる朝のラジオ体操を、町内の公園等5か所で実施。参加者からは、「数か月ぶりに友だちに会えた」「ひとりでは体操をする気が起きない。みんなできると気持ちがいい!」と、喜びの声が聞かれたそうです。

お楽しみ会の代わりにお弁当配布で顔合わせ

三芳町藤久保2区老人クラブでは、月1回のお楽しみ会の代わりとして、会員にお弁当を配りました。お弁当を取りに来てもらうことで、皆さんが元気であるか確認でき、外に出かける機会をつくろうと始まった活動です。

会員の皆さんも、「外出し、

お弁当を受け取りに行くという用事」ができ、配布日を楽しみにしているそうです。さらに、お楽しみを増やすため、お弁当は数種類のメニューか



ら好きなものを注文することもできるようにしました。

会食の代わりに

入人数を制限して映画観賞会▽

公共施設で皆が集まっていたの飲食が難しくなったため、一人暮らし高齢者会食会に代えて、1回に集まる人数を制限して映画観賞会を行っています。複数回開催することで全員が参加できる工夫をしました。「家で一人でテレビを見るより楽しい」「出かけるきっかけになった」と、参加者に喜ばれているそうです。

△お茶や絵手紙を届け、笑顔で交歓▽

飲食を伴う集まりができない中、これまで行われてきた会食会の参加者の自宅までペットボトルのお茶を届けて、夏の間は熱中症予防の声かけを行いました。つながりを切らず、「楽しみに待ってたよ」と言ってもらえることで活動者も笑顔になれる活動です。

ほかにも、絵手紙を製作して届ける活動などでは、「気にかけてもらっていることがわかってうれしい」という感想が聞か



れるとのことでした。

これまでと変わらず福祉新聞を届ける活動

一人暮らしの高齢者に毎月届けられる福祉新聞。自粛期間中はボスティングでしたが、徐々に直接届ける活動を再開しています。

「今日、初めて人と話した」という喜びの声のほか、コロナ以前は「ポストに入れておいて」と言っていた人も、最近は顔を見せてくれるようになったそうで、コロナの時代でも人と人とのつながりを維持したり、さらに強めるきっかけとなる大事な活動であることが再認識されています。



コロナ禍でも変わらず必要とされる生活支援

各地区社協が行っている無償の生活支援活動「ちよつと助け隊」は、コロナ禍でも支え合い活動が続けました。「緊急事態宣言が出ても『助けてほしい』と連絡が来ました。活動するべきか悩みましたが、こんなときでも生活している限り何らかの困りごとは必ずあります。心細

い思いをしている方もいるでしょうから、活動を継続することにしました」と、助け隊部長さん。もちろん、感染予防策は行った上で、強風により溜まった砂の掃除や粗大ごみの搬出、家具の組み立て、草むしり、電球交換などの依頼に対応しています。「コロナだから来てもらえないと思った」「来てくれて安心しました」と利用者は大変感激してくれたそうです。

このような活動は困りごとのお手伝いをするだけでなく、不安を取り除き、安心して生活できる地域づくりも担っていることが、コロナ禍であらためて確認されました。

三芳町では今後、外出できずに家にこもりがちな高齢者と、子どもたちのつながりをつくる活動も計画しています。こんなときだからこそ、住民同士で知恵を出し合い、ちよつとした工夫を重ねて、みんなで支え合える仕組みづくりを柔軟に前向きに進めています。



「地域助け合い基金」へのご寄付をお待ちしています！

1. 寄付金の使途

共生社会を推進するため、助け合い活動の支援に活用させていただきます。

助成の対象は、地域で暮らす人同士の助け合い活動であり、新たに団体を設立する場合のほか、新たに活動を広げる場合やコロナ禍に対応して特別な助け合い活動を行う場合も含みます。

高齢者、子ども、認知症、障がい、生活困窮の方々、刑余者、外国人、ケアラの支援ほか、分野は問いません。ただし、日本国内の活動に限ります。

本基金は、支援したい市区町村（区は東京都の特別区）をご指定いただけます。

2. 税制上の優遇措置

当財団にいただいたご寄付は、税制上の優遇措置の対象となります（当財団発行の領収証が必要となります）。

3. ご寄付の方法

（1）銀行振込によるご寄付

三井住友銀行 浜松町支店（普通）口座番号 7859452

三菱UFJ銀行 浜松町支店（普通）口座番号 0095446

（口座名義 ※いずれも同様）

公益財団法人さわやか福祉財団 地域助け合い基金

※銀行お振り込みの場合は、送金者の情報がカタカナ表記のお名前のみとなるため、当財団発行の領収書が必要な場合や地域の指定をご希望の場合は、お手数ですが「寄付申込書」を当財団宛お送りください。当財団へのお電話でも承ります。

（2）郵便振替によるご寄付

（口座記号番号） 00110-7-709627

（加入者名） 公益財団法人さわやか福祉財団

※通信欄に、ご指定がある場合の市区町村名（区は東京都の特別区）と、ひと言応援コメントなどを記入ください。

※手数料不要の振込取扱票をご用意しています
ので、お申し出いただければ郵送いたします。

（3）クレジットカードによるご寄付

右のQRコードもしくは

当財団ホームページよりお申し込み下さい。



助成応募については、24ページおよび当財団ホームページをご参照ください。

「寄付申込書」「パンフレット」なども、ホームページからダウンロードできます。

<寄付・助成のお問い合わせ>
地域助け合い基金担当

電話：(03)5470-7751 FAX：(03)5470-7755
メール：mail@sawayakazaidan.or.jp

「地域助け合い基金」状況のご報告

恒例になりました「地域助け合い基金」状況のご報告、今月号では、9月15日現在の状況をお伝えします。

◎寄付受付額 142件

786万6200円

このほかに当財団より3千万円を供出

◎助成実行額 188件

2413万9350円

(9月15日 当財団ホームページ開示時点)

9月号でご報告した8月15日現在以降、6件10万8000円のご寄付を頂戴し、50件650万円の助成を実行いたしました。

ご寄付については、特別定額給付金の支給から時間も経過しておりますが、銀行振込、郵便振替に加

えクレジットカードによる寄付も可能となっておりますので、ぜひご検討いただきますようお願いいたします。

助成については、8月15日付で応募要領の一部を変更いたしました。その後ご応募いただいた皆様には、変更の内容を理解し、スムーズに対応いただけている状況です。今回の応募要領の変更により、9月号までお伝えしていた助成の種類（Ⅰ（コロナ禍対応助成：コロナ禍により被った助け合い活動の被害額の支援）、Ⅱ（同：コロナ禍により生じた生活上の不便・不安を解消するための助け合い活動）、Ⅲ（共生社会推進助成：地域の助け合いを維持・発展する活動））を一本化して「共生社会を実現するための助成」としています。

9月号での報告以降の助成内容を見えますと、

助成先の活動は、通いの場、子ども食堂、配食、園芸クラブ、絵本バス、健康体操、地域通貨、ごみ出しの支援等と多岐にわたっており、対象も高齢者、子ども・子育て、外国人、生活困窮等幅広く、共生社会実現に向け多方面で活動されている方々からご応募いただいています。

本基金立ち上げ以来、助成させていただいた団体からは活動報告書をお送りいただいておりますが、活動報告書や助成応募の内容からは、コロナ禍で多くの活動が制約を受ける中で、さまざまな工夫をして活動再開を模索し、実行されている様子をうかがい知ることができます。助成の種類は一本化しましたが、コロナ禍に対応した特別な取り組み等にも助成させていただきますので、ぜひ本基金助成への応募をご検討ください。

なお、本誌では助成先の活動を毎号いくつかご紹介していますが（12～13ページ参照）、当財団ホームページにはご提出いただいた活動報告を全件掲載しています。下のQRコードからもアクセスできます

ですので、ぜひご覧ください。

助成団体・個人は、おおむね全国に及びます。皆様からのご寄付はこのように全国の活動を支える原資となります。これからも応援をどうぞよろしく願います。（事務局長・内田）

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能な金額も一覧できますので、寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。

●基金に関する情報、およびクレジットカード決済は、QRコードもご利用ください！



財団ホームページ内
基金関連ページ



クレジットカード
決済ページ

基金に関する
ご意見・お問い合わせ

<地域助け合い基金担当>

電話：(03) 5470-7751 FAX：(03) 5470-7755

メールアドレス：mail@sawayakazaidan.or.jp

応援ありがとうございます！

「地域助け合い基金」助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、全国の助け合い活動を支援している「地域助け合い基金」。すでに助成金を活用し、活動の結果をご報告いただいている団体から、今月号も3団体を紹介します。なお、活動報告は当財団ホームページに随時アップしておりますので、ぜひご覧ください。

兵庫県神戸市

居場所のつながりを持ち続けられた

居空間RocoCo

助成金額 20万円

居空間RocoCoでは2009年の設立以来、週2回の地域住民のためのカフェ、生きがいづくり講座・健康講座、がん患者のためのタオル帽子作りボランティア等を行っています。2月28日から6月15日まで居場所活動中止し、収入のない中、本基金の助成金は家賃補助と再開に向けたコロナ対策に使われました。いつ居場所

を再開してもいいように、2か月後のカレンダーや毎月の「RocoCo通信」を掲示したり発送したりしたということです。

「『通信』では、手作りマスクの作製を呼びかけたり、次号ではいただいたマスクを紹介したり、寄付させていだいた介護施設からの写真を載せたりと情報発信を続けられたのも、家賃補助していただき通信を発行する金銭的、心理的余裕が持てたのがよかったと感じています」「皆さんと自粛中も何らかの形でつながりを持ち続けられたことがうれしいことでした」と報告を寄せてくださいました。

コロナ禍で緊急食糧支援

NPO法人たすけあいネットあゆむ

助成金額 20万円

たすけあいネットあゆむは、2015年よりフードバンク事業を開始。また、食糧支援だけで解決できない、無償の学習室・制服リユース事業・平日の居場所フリースクール・ひきこもりの社会復帰訓練・高齢者の生活支援・親子食堂・DVシエルトター・困窮者行き場のない人のためのシェアハウス等の事業を通して「いち早くつながる」ことに力を入れています。コロナ禍で、雇い止めや労働時間の短縮、収入減、食費と光熱費等が家計を圧迫し、休校で子ども居場所が減り、虐待やDVが増えたそうです。2月末からは緊急食糧支援として、多い日は1日150キロ以上の食品を世帯人数に合わせて段ボールに詰めて宅配で送る活動を実施。本基金の助成金は、3〜6月に行ったこの活動の宅配料、人件費、梱包資材、事務用品費等に使用されました。今後も、「生きる事は食べる事」活動の中心である食糧支援を行いながら、問題解決に向け伴走型支援をしていく、ということです。

コロナ禍によるミャンマー人ら外国人の生活維持に貢献

NPO法人リンクトゥミャンマー

助成金額 10万円

リンクトゥミャンマーは、助け合いの精神でミャンマー人を中心とした外国人に日本での定住支援を行い、人権擁護や国際協力に寄与することを目的に活動しています。コロナ禍で、休業・離職・雇い止めなどにより給与が減少した外国人難民や移民・留学生の給与保証、住居確保給付金、税金支払い猶予などの各種手続きに対する申請支援通訳・翻訳、申請同行、申請方法や窓口指示等の定住支援ニーズが激増。そのため、給付金情報などビザ・語情報を収集・翻訳して随時フェイスブックを更新電話等で相談員が24時間365日相談受付・対応し、申請支援を行っています。本基金の助成金は、主に就労に関する相談活動26回に充てられました。今後も、ミャンマー人をはじめとする外国人が安心して日本社会の一員となり、日本人にも外国人にも住みよい共生社会を形成するために努力したい、との報告をいただきました。



地域がワンチームとなって 高齢者の買い物支援と通いの場を創出

ごましお健康くらぶ（佐賀県嬉野市）

生活支援体制整備事業を契機として、各地で広がる地域共生の取り組み。佐賀県嬉野市塩田町では、高齢者の買い物支援と介護予防を同時に進める「ごましお健康くらぶ」が立ち上がり、いきがいや支え合いの地域づくりにつながっています。その創出までの道のりと活動現場を紹介します。

（取材・文／城石 真紀子）

事前に詳細なアセスメントを実施

佐賀県の西部に位置し、日本茶の名

産地として知られ、日本3大美肌の湯に数えられる嬉野温泉を有する嬉野市。人口は約2万6000人、高齢化率は34・1%（2020年5月現在）で、

山々に囲まれた盆地と中山間地に入々が暮らしている。

同市では、16年度より生活支援体制整備事業に着手。詳細なアセスメントをした上で立ち上がったのが、高齢者



の介護予防と買い物支援を同時に進める、塩田町の「ごましお健康くらぶ」だ。中心となって取り組みを進めてきた、第1層生活支援コーディネーターの溝口道昭さんに事業開始の経緯を聞いた。

「生活支援体制整備事業が始まり、私たちがまず取り組んだのは、嬉野市内88行政区を訪問し、地域の現状と課題を把握することでした。このアセスメントから明らかになったのは、要支援の独居高齢者の急増、郊外での買い物場所の消滅、公共交通空白地帯の存在や運転免許証返納者の増加による移動の問題などでした。この結果を踏まえ、買い物支援体制構築の必要性を感じ、18年4月には市内の買い物ができる場所22店舗（コンビニ・スーパー・物産館・ドラッグストアなど）を1軒1軒回り、訪問調査を実施しました。最初にイメージした買い物支援策は移動販

売だったので、お店が実施しているサービスやお客さんからの要望、今後やれそうなどなどを聞き取りました。そんな中で、塩田地区のあるスーパーの店長さんと話をしているときに、

『山口県防府市ではショッピングモールの中で居場所をやっているところがあるんですよ』と言ったところ、『それ、うちでやったら？』との提案をいただきまして。そこから、買い物支援と介護予防のための居場所を同時につくろうという事業の構想が生まれたんです」

塩田地区は、事前のアセスメントで公共交通の空白地帯が多く、買い物場所も少ないことがわかっていたため、免許を返納しても安心して暮らせるモデル地区にもなる。計画段階では、塩田町在住の要支援者のうち7割にあたる78名に対して利用ニーズの調査も行った。

「訪問聞き取りを行ったところ、欲しい買い物支援策は、店までの送迎が32・1%でトップ。移動販売が僅差でそれに続きました。でも実は、『移動販売があったらいい』と答えた方は大体家族と同居されているか、週末に家族が来て買い物に連れて行ってくれるんですね。一人暮らしなどで本当に困っている方は、移動販売では品数等が少なく、十分な買い物ができない。店まで連れて行ってほしいというのが本音でした。そのリアルニーズを私たちは読み取れていなかったんです。そして、生の声を聞いたからこそ、そのことに気づくことができたのは大きな収穫であり、反省点でもありました」

この利用ニーズ調査の結果では6割を超える要支援者が、買い物弱者救済と、介護予防のための居場所ができたら利用したいと回答。それが、実現に向けての弾みともなった。

運営団体、なければ創ろう

具体的に動き始める中で、やらなければいけなかったのは、居場所の運営団体と移動支援団体の確保だった。しかし、運営を担ってくれる団体探しは思いのほか難航した。

「市内の社会福祉法人やNPO法人、校区コミュニティ、婦人会などを当たり、その中のある団体から好反応を得て交渉を続けたものの、補助金などの条件で折り合いがつかずに破局。そこで、方針を転換。やってくれるところがなければ創ればいいと、市民ボランティアを募集することにしました。すると、市役所OBの方々を中心に人が集まり、説明会、ボランティア勉強会を経て、14名の住民の皆さんとボランティアの会を立ち上げることができました」

一方の移動支援団体については、地域の社会福祉法人からすらなり協力の承諾が得られた。

「社会福祉法人には地域貢献の責務がありますが、ニーズがわからず一歩踏み出せないところが多いんですね。でも、マイクロバスと運転手を出せばいいということ、貢献の仕方がわかりやすかったのでしょう。『それぐらいのことなら』と快諾していただきました。その後、試験運転を開始して定員15名の枠がすぐに埋まったことを受け、マイクロバス1台体制ではニーズに応えきれないことがわかりましたので、すぐに他の社会福祉法人にも協力をお願いに行き、現在は済昭園とたちばな会の2団体が移動支援を担ってくれています」

そして、合計5回の試験運転を経て、

事業開始までの歩み

- 2016～17年 嬉野市全体の地域アセスメントの実施
- 2017年 第1層協議体にて買い物支援策の検討
- 2018年4月 市内にある買い物場所22店舗への訪問調査
店側からの提案を受け、構想を立案
- 5月 居場所の運営団体を探し始める
- 7月 モデルとなった「幸せます健康くらぶ」(山口県防府市)を視察
- 8～9月 塩田地区の要支援者78名に利用ニーズ調査
- 10月 移動支援団体を探し始める
- 11月 ボランティア募集開始
- 2019年2月 「ごましお結びの会」設立
- 3月 試験運転開始
- 5月 「ごましお健康くらぶ」事業開始

19年5月7日、正式に「ごましお健康くらぶ事業」を開始。名称の由来は、対象となる塩田町が五町田、久間、塩田、大草野の4地区からなっているの

で、そこから1文字ずつ取って「ごましお」。また、活動を通して自助力を高める観点から「健康くらぶ」と名付けられた。

手と手、心と心を結んで 楽しく活動

ごましお健康くらぶの開催は、毎週火曜日。午前9時頃から、2台のマイクロバスが利用者の自宅まで迎えに来て、10時頃から町の中心部の嬉野市社会文化会館「リバティ」で、介護予防の百歳体操やレクリエーションで交流。その後、徒歩で近隣ショッピングセンターに移動して買い物をし、会場から再び自宅まで送迎。運営を担うのは、この事業のために新たに結成された市民ボランティア団体「ごましお結びの会」の16名だ。

「新型コロナウイルスの感染拡大で、緊急事態宣言が発令された際にはいっ

たん活動を休止し

ましたが、

解除後に

再開。3

密対策で、



市役所OBの蒲原さん

百歳体操の後のレクリエーションをお休みにしたり、バス内での密を避けるために新規利用者の募集を中断するなど、十分な感染予防策を講じて開催しています」と話してくれたのは、同会代表の蒲原知愛子さん（70歳）。

活動休止中もつながりが途絶えないよう、利用者一人ひとりに電話して安否確認をしたり、本当に困っている人にはボランティアのメンバーが個人的にマイカーで買い物に連れて行ったケースもあるという。また、昨年12月には買い物先のスーパーが閉店。今年5月に新しいスーパーが同じ場所にオープンしたが、その間は代替手段として、

5キロ先の隣のスーパーまで送迎するというスタイルをしばらく続けるなど、利用者の立場に立った運営をしてきた。

「皆さん、毎週ここに来て体操をしたり、おしゃべりをして交流するのを本当に楽しみにしていて、『楽しかー』と笑顔が絶えないんですよ。私たちボランティアの多くは60代後半。ボランティアと利用者という立場の違いはありますが、実際にはあまり垣根はありません。百歳体操も一緒にやっていますし、買い物の際もべったり付き添うのではなく、荷物が重いときに代わり持つなど、必要な場面のみ支援をしています」

高齢者が安心して生活できることが事業の目的だが、ボランティア自身の介護予防にもなっている。みんなの手と手を結ぶ。心と心を結ぶ。楽しい生活に希望を結ぶ。蒲原さんは、この活

動は「おむすび」であり、みんなで会
の名前を決めたときにもその思いを込
めたと話す。

「団塊の世代が後期高齢者になる20
25年問題。2040年には団塊ジュ
ニア世代も高齢者になってしまう。み
んな、子どもには迷惑をかけたくない

と思っています。自分たちの老後のた
めにも、これから先の暮らしをどうし
ていったらいいのか、地域で何ができ
るのかを、利用者の皆さんからいろい
ろお話をうかがいながら考えていきたく
い。それがこの会を立ち上げた狙いで
もあるんです」

事業開始からおおよそ1年半。火曜日
にごましお健康くらぶに行けば、いろ
んな人と話ができて、体を動かすこと
で筋力や体力もアップ。楽しい時間が

目指すは、安心して暮らせる 地域共生社会の実現



マイクロバス2台で送迎



介護予防の百歳体操。みんなと一緒に楽しく続けられる



体操後のレクは歌ったり頭の体操をしたりと、笑いが絶えない時間（現在、コロナ予防のため休止中）



お楽しみの買い物。自分の目で見えて購入するのが良い刺激に

過ごせるから、心も体も若返るのだから。

「はたから見ていても、皆さんの表情が明るくなったのがわかります。ネーミングもよかったですよね。ここは健康くらぶなので、自分たちが元気になるために通うのであって、何かのサービスを受ける場ではない。その事業の意図を利用者の方々もちゃんと認識してくれていますし、ボランティアの皆さんも一緒に介護予防をするというスタンスで活動されています」と溝口さん。

利用者の中には、要支援の認定を卒業した人もいます。そのうちの一人の90歳の男性は、18年にけがをして1か月入院。退院後は子どもが住む関東へ行き、一人で暮らせるまで回復して塩田に戻ったが、免許を返納したので買い物が一番の困りごとだったという。そして、「運動と買い物支援は私が一番

望んだこと。このくらぶがあれば、もうデイサービスには行かなくてもいい」と要支援の認定の更新をしないと決めたようだ。

「この方には、表彰状を作ってみなでお祝いしましたが、90歳を過ぎても一人暮らしができて、仲間がいて、元気で充足した生活を送る姿を見せてもらえるのは、未来への希望につながる」と蒲原さんは笑顔を見せ、「この事業の一番の成果は、ごましお健康くらぶの運営に職種や立場を超えて、塩田地区の皆さんが参加してくれたこと」と溝口さんは胸を張る。

地域包括支援センター（ケアマネジャー）が入り口となって利用者の受け付けをし、社協の生活支援コーディネーターが全体を調整。ごましお結びの会の住民ボランティアが直接的なサポートをし、2つの社会福祉法人はバスと運転手を出し、地域のスーパーと社

会文化会館が協力してくれ、緊急時には地域の医師に対応してもらえる体制も整えた（次ページの図参照）。

「高齢者の暮らしを支えていくために、まさに地域の皆さんがワンチームとなって協力や支援をする。これこそが、まさに地域包括ケアシステムだと思うんです。それが実現できて、しかも目に見える形で地域の人たちにも伝えることができたのはよかったと思っています」（溝口さん）

今後の展望としては、ごましお結びの会を第2層協議体に位置付けているので、ごましお健康くらぶの運営だけに捉われず、できる活動を模索していきたいとのこと。

「コロナ禍で対応できなかったのですが、利用者からはクリーニングを出しに行ったり、市役所に行ったりしたいという要望もあったので、前向きに検討していきたい。そして、活動を広げ

【ごましお健康くらの仕組み】

居場所運営

ごましお
結びの会

協力医療機関

光武医院

受付

地域包括
支援センター

買い物& 体操の場

ショッピング
センター
ぶらっと
社会文化会館
リバティ

全体を調整

第2層生活支援
コーディネーター

移動の支援

社会福祉法人
済昭園・たちばな会

事業全般

嬉野市福祉課

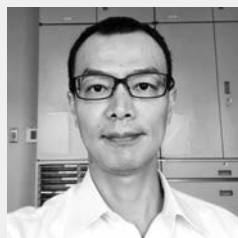
ていくためにも、私たちの会の理念に共感して、一緒に活動してくださる仲間をもっと増やしていきたいと思っています」という蒲原さんたちが、その先に見据えるのは、安心して暮らせる共生社会の実現。地域の未来に向けて、その挑戦はまだまだ続いていくことだろう。

嬉野市塩田町をモデル地区に定めた、買い物支援と介護予防の場。塩田地区を移動支援のための送迎車輛が走り、市民ボランティア団体「ごましお結びの会」のサポートを受け、介護予防の百歳体操と買い物支援を受けることができる。利用対象者は市内在住の65歳以上の高齢者（要支援者・総合事業対象者・日常的な買い物に困っている者のいずれかに該当）。開催日時は毎週火曜日の9時～12時30分。1回の利用定員は30名、利用料金は200円。ごましお結びの会は有償ボランティアで、会の規定に応じて年度末に謝礼が支払われる。

●連絡先／〒849-1411 佐賀県嬉野市塩田町大字馬場下甲1967
嬉野市社会福祉協議会塩田本所内
TEL 0954-66-9131

住民の声を直接聞き、明るい未来を共有し、 支え合いの地域づくりを全力で楽しみたい

嬉野市の第1層生活支援コーディネーターとして、協議体と協力し、生活支援体制整備事業の推進役を担う溝口道昭さん。その取り組みや地域づくりへの思いをお聞きしました。



嬉野市
第1層生活支援コーディネーターの溝口さん

● 仕組みづくりのヒントは会話の中に

嬉野市は2016年4月より生活支援体制整備事業に着手し、同年9月に第1層協議体が立ち上がりました。事業開始にあたっては地域の実情を知るところから始め、現在は居場所づくりを中心に、移動支援や住民参加型の生活支援などさまざまな取り組みを進め、その成果も目に見えて増えてきています。

この間、私が生活支援コーディネーターとして一番大切にしてきたのは、地域の人たちの「生の声」を聞くことです。例えば、最初はお遍路さんながらに市内88行政区すべてを自分の足で回りましたが、住民の皆さんや関係機関の方々と直接話をする事で、地域の課題がより立体的

に見えるようになり、協議体において、具体的な生活支援の方法や働きかけを考えるのに役立ちました。新しい居場所にしても、新しい仕組みにしてもほぼすべては、そうした会話の中からヒントを得て生まれたものです。

● 単なる個別課題の解決でなく

それからもう一つ。地域づくりというのは、ただ現状の地域課題を探って、その課題を解決するだけの対策を講じてもうまくはいきません。相互理解のために納得がいくまでとことん話し合い、「明るい未来」を共有できたときに、相手の方が動いてくれたり、より発展的なものへと化学変化が起くというのが私の実感です。「ごましお健康くらぶ」立ち上

げの際も、単に「買い物弱者がいるから何とかしたい」という課題解決だけではなく、「これを解決できたら住みやすいまちになる。安心できる」という未

来への希望が見えたからこそ、心が弾んでワクワクし、関わった皆さんは口をそろえて「楽しい」と話してくれました。また、私自身も大変でしたが楽しかった。だからこそ、まずは「こんな地域にしたい」という理想を掲げる。そこから、現実を理想に近づけるために何ができるかを考えていくことが大事です。そして、「まちづくりは人づくり」ですから、さまざまな出会いを思い切り楽しみたい。私は大人の責任として、嬉野市の子どもたちに、安心して暮らせる町を残していきたいのです。その目標に向けて、これからも全力で楽しみながら支え合いの地域づくりに貢献していきたいと思っています。

看取り・終末期を考える

裏を見せ、表を見せて…

絵描きになるか地雷除去か

中年で人生にスイッチを入れる

尾崎 雄

サマセット・モームの小説、『月と6ペンス』（新潮文庫ほか）はおもしろい。

主人公のストリッ克蘭ドは身勝手な男だ。株式仲買人としてすっかり稼いできたので妻は作家らを自宅に招いて芸術サロンを持てるほどだった。ところが40歳を過ぎたある日、突然、仕事も家族も擲^{なげ}つて家出し、絵描きになる。南海のパラダイスであるべき太平洋の島に第二の人生をもとめるが、最後はハンセン氏病に罹患して悲惨な死を遂げる。ところが彼の死後、その作品は高く評価され、市場で莫大な値段が付く。あのモジリアニやゴッホの作品がそうだったように。

夫のお陰で、多くの作家らを自宅に招き、芸術家とつきあうことが生き甲斐だったス

トリッ克蘭ド夫人は「人生というゲームをプレイする芸術家たちのルールを肯定はしても、そのルールを自分の人生に当てはめようなどとは一瞬たりとも考えなかった」。すると、生き甲斐の基盤を与えてくれていた夫が出奔。初めて自活に迫られて起業に成功し、社会参加を果たす。夫は絵描きになるという自己実現を貫き、夫人は自立の人生を獲得する。そして社会は崇高な文化遺産に恵まれる。ひょっとすると、これは、めでたしめでたしの物語ではないか。子供のころから画家志望だったストリッ克蘭ドは「絵描きでは食っていけない」という父親の教えを忠実に守ったあと、中年から夢を果たし、結局は「不幸な人生」を遂げるのだが、本人に言わせれば「他人

老・病・死を考える会プラス世話人

おざき たけし

1942年生まれ。元日本経済新聞編集委員。認定NPO法人コミュニティケアリンク
東京副理事長・日本死の臨床研究会会員・さわやか福祉財団評議員ほか

の知ったことか」。

「本当の自分」に戻りたいという想いは、あるタイプの男にとつて見果てぬ夢だ。そう思いつつ『月と6ペンス』を読み終えたところ、たまたま一冊の本にであつた。

『地雷処理という仕事——カンボジアの村の復興記』である（ちくまプリマー新書）。

地雷処理という命がけの仕事に取り組んでいる元自衛隊員の手記だ。著者の高山良二氏は、内戦でカンボジア全土の埋設された500万個とも700万個ともいわれる地雷を一つ一つ取り除き、人々が生活できる安全な土地を取り戻すという途方もない夢に取り組んでいる。住民に地雷除去の訓練を施す住民参加型の国づくりだ。文字通り命がけ。対戦車地雷の処理に失敗して7人が死亡するという悲劇もあった。

高山さんは72歳。45歳でカンボジアのPKOに志願して「人生のスウィッチ」が入った。1993年、PKOの任務を果たして帰国する機上からカンボジアの国土を見下

ろしたとき、「私が求めていたものはこれだと思った」。それは「日本のために？

やはりカンボジアのためだろうか？」と自問するうち、「どちらかと言えばおそらく、自分の生き方、自分のためなんだろう」ということに落ちついた。

よりによって、カンボジアに舞い戻り、地雷を取り除くという命がけのボランティアを始めるなんて——身近な人々は「それで生活できるんか？」と呆れたが、「そんなことを考えてねえがな」と答えたそうだ。

この世間離れた感性は、人生のすべてを擲って絵描きになってしまったストリックランドの心境とどこかで通じているようだ。

人生の転機は、偶然と必然が交差するとき訪れる。人間は生き甲斐を論理的に見つけるとは限らない。「川に落ちれば、泳ぎのうまい下手は関係ない。岸に上がるか溺れるか、二つにひとつだ」。ストリックランドは『月と6ペンス』の中で、人生の折り返し点にたった覚悟を、こう言い放った。

～助成応募要領が一部変更になりました～

つながろう、心で 広げよう、笑顔の助け合い！

「地域助け合い基金」でコロナ禍を乗り越えて共生社会へ

8月15日より、「地域助け合い基金」の助成応募要領が一部変更となりました。

新しい応募要領の概要は下記の通りです。

1. 期 間 常時受付。基金の範囲内で、配分は随時行います。

2. 対象とする活動

共生社会を推進するための助成として、地域で暮らす人同士の助け合い活動（つながりづくりを目的とした居場所や地域活動を含む）。新たに団体を設立する場合のほか、新たに活動を広げる場合やコロナ禍に対応して特別な助け合い活動を行う場合も含まれます。高齢者、子ども、認知症、障がい、生活困窮の方々、刑余者、外国人、ケアラーの支援ほか、分野は問いません。ただし、日本国内の活動に限ります。

3. 助成額・回数

助け合い活動の開始、維持、発展のため具体的に必要とする額。上限15万円。原則として1回。ただし、やむを得ない時は2回。

4. 助成の対象

法人格の有無を問いません。個人による活動も含まれます。

5. 応募方法 当財団ホームページの「助成応募要領」で詳細ご確認のうえ、申込書および必要添付書類をメールまたは郵送にて当財団までご送付ください。

<メール送付先> tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

<郵送先> 〒105-0011 東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
公益財団法人さわか福祉財団 「地域助け合い基金窓口」

6. その他

助成金を活用して行った取り組み内容、活動の効果をご報告ください。

助成応募時の推薦、あるいは、助成を受けた活動の報告ご提出時に、地域の生活支援コーディネーターとの連携をお願いしています。また、助成した活動の報告内容については、当財団のホームページや冊子等で公開させていただきます。

【総合お問い合わせ】 公益財団法人さわか福祉財団

〒105-0011 東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階

電話 (03)5470-7751 FAX (03)5470-7755

メールアドレス mail@sawayakazaidan.or.jp

※応募書類の送付先メールアドレスとは異なりますのでご注意ください。

新しい ふれあい社会づくりに 向けて

いきがい

ふれあい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。

特に現在は、全国自治体が新地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりを強力に支援しています。

どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

● 新地域支援事業・助け合いの地域づくり

北から南から 各地の動き

● その他の財団の活動 など

ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・

ご寄付者の皆様のご紹介

さわやか活動日記（抄）





新地域支援事業・ 各地の動き

(2020年8月1日～31日・9月2日)

●全国各地で、

推進の支援をしています

●活動の一部を紹介しています

住民に参加を呼びかける

(住民対象のフォーラム、勉強会等)

三春町 (福島県)

25日／三春町住民講演会が開催され、当財団も協力。生活支援コーディネーターのほか、協議体に参加してもらいたい人を中心に声かけを行い、コロナ対応として400名収容の会場で130名が参加した。坂本浩之町長の「住

民一人ひとりがつながり、孤立化を防ぎ、お互いが気にかけて、助け合う地域をつくっていきましょう」とのあいさつに続き、行政説明が行われた後、財団から基調講演で「助け合い創出・発展のために、ぜひ話し合いに参加してほしい」と話した。パネルディスカッションでは、サロン主宰者と生活支援コーディネーターによる活動報告が行われ、財団からコメントした。各パネリストも、「自分たちでできることから始めよう、何でも相談してほしい」と会場に呼びかけた。今後は、コロナ対策をした上で、9・10月の2回、住民勉強会を行う予定。(岡野)

生活支援コーディネーター・ 協議体と連携

加須市 (埼玉県)

20日／加須市北川辺地区で、当財団が立ち上げから支援してきた第2層協議体(北川辺みずわの会)の第1回運営委員会がコロナ対策をした上で開催さ

れ、運営に協力。財団より、これからの取り組みを考えるための参考としてもらうよう各地の事例とコロナ禍での活動を紹介した。運営委員会は、活動創出に向けて、地域で行われている支え合い活動の洗い出しを中心に行った。10・11月にも「北川辺みずわの会」を開催する予定。財団も引き続き支援を行う。(岡野)

協議体編成のための 研修会・勉強会等に協力

羽後町 (秋田県)

29日／7月に引き続き、羽後町で第2層2圏域の適切な体制をつくるための勉強会3回目が開催され、当財団も講師としてリモートで協力。第1層生活支援コーディネーター小林諭史氏からの前回の振り返りの後、財団から「目指す地域像を実現するチームをつくらう」と題し、同じ人口規模で2年前に助け合いが創出された長崎県波佐見町の事例を交えて講演した。グループワ

ークでは協議体選出に向けて意見を出し合い、アンケートでも意見を出してもらった結果、協議体への参加希望11名、検討中12名、推薦したい人の名前が5名挙がった。参加者からは「町の5～10年後を考えることで気づきが多くあった。新しい志になった」「できる限り力になりたい」などの前向きな意見が寄せられた。

この勉強会を基に間もなく第2層が動き出し、10月以降、さわやかインストラクターの加藤由紀子氏を講師として助け合い創出勉強会を開催する予定。

(鶴山)

生活支援コーディネーター 情報交換会の準備会に協力

群馬県

27日／「群馬県新地域支援事業推進協議会」が県レベルの企画として実施する「生活支援コーディネータープロジェクト情報交換会」について準備会を開催し、当財団も推進協議会メンバーと

して協力した。群馬県ではこの企画を通して、生活支援コーディネーターのネットワーク構築を目指し、自由度の高い情報共有を可能にする環境整備を進める予定。

(長瀬)

生活支援コーディネーター 研修に協力

山梨県

26日／山梨県で生活支援コーディネーター研修が開催され、当財団の鶴山が協力。コロナ禍のため2会場に分けて実施し、この日は甲府市で開催された。各市町村がそれぞれの実情を踏まえて、生活支援体制整備事業を効果的に進めていくために必要な視点、知識、技術を学ぶことと、県内の生活支援コーディネーターや行政等の関係者がつながりをつくり、今後も情報共有しながら各地域の助け合いづくりを推進することを目的とした。事前に各市町村を対象に実施されたステップ①～③の取り組みや課題、コロナ禍における取り組み

み・課題等についてのアンケート結果を、県が市町村ごとにまとめて当日配布。また、コロナ対策でグループワークができないことと、市町村によって取り組みや課題がまちまちであることから、財団の進行により全体で情報交換する内容とした。

はじめに、鶴山より体制整備事業の意義について基本を伝え共有し、その後、ステップ①～③ごとに各地の取り組みや課題を出してもらい、情報交換。今年度、アドバイザー派遣事業でも講師として協力してくれている南アルプス市の生活支援コーディネーター齊藤節子氏と小林陽一氏からも、実践に基づくアドバイスを事例と共に提供してもらいながら進めた。

研修後アンケートでは、「他市町村の取り組みを聞き、同じ悩みがあることに少し安心した」「コロナ禍でも、まずやってみるという気持ちを忘れずに少しずつできればいい」などの前向きな感想があった。



9月2日／8月26日と同様の研修が富士吉田市で開催された。参加者が20名程度ということもあり、積極的な情報交換につながるようにと会場の設定を県が工夫し、全体参加の情報交換会となった。ステップ①②③の基本を鶴山が押さえ、その事例として南アルプス市の斉藤氏と小林氏に事例を紹介してもらった上で、他市町村の事例や質問等を出してもらいながら進めた。アンケートには、「具体的な内容で良かった」「なかなか行動に移せなかったが、まずやってみる」ということで取り組みたい」「南アルプス市や他市町村の活動が聞けて参考になった」「今後の事業の参考にしたい」などの意見があり、参加者から大変好評を得る研修となった。2会場とも県内のさわやかインストラクター塚田好子氏も参加し、県内の取り組みを共有した。（川田）

（本稿は、岡野貴代、川田利輝、鶴山芳子、長瀬純治）

さあ、言おう 2020年8月特別号

特別対談 宮本太郎・堀田力

青写真を描くのは地方自治体

～地域共生社会への道と難題～

コロナ禍を乗り越えた後、私たちはどのようにして皆が幸せに暮らせる社会を築いていけばよいのでしょうか。

当財団会長・堀田力が中央大学法学部教授・宮本太郎氏をお招きして、今後の日本における地域共生社会のために、3つの難題について幅広い視点から話し合いました。

今後の共生社会づくりに、どうぞご活用ください。

目次

選ぶ道は地域共生社会

地域共生社会への道筋と大きな課題

難題1 外国人の受け入れと共生

難題2 多様な特色（ダイバーシティ）を持つ
地方の共生社会の復活

難題3 AI・ロボットの能力向上と共生社会

◎お問い合わせは広報まで→ 電話：(03) 5470-7751
メール：pr@sawayakazaidan.or.jp



助け合いの仕組みづくりをさらに進めよう

生活支援コーディネーターと協議体の取り組みを考える情報紙

『さあ、やろう』vol.13 ご活用ください！

生活支援コーディネーターと協議体の取り組みを考える情報紙『さあ、やろう』。新地域支援事業に携わり、地域における助け合いの仕組みづくりを進めている方々の参考となる記事を掲載し、全国の関係者の皆さんに頒布しています。また、財団ホームページからもダウンロードできます。ぜひご活用ください。

【vol.13目次】

- * 特集・座談会 コロナ禍を乗り越えて共生社会を築こう
- * ニッポンふれあい社会 堀田力
- * つながろう心で、広げよう笑顔の助け合い
「地域助け合い基金」と共生社会づくり 清水肇子
- * 「地域助け合い基金」状況ご報告
- * 「堀田コラム 基金前編」
みんなで地域共生社会をつくる
地域助け合い基金は重要なツール

Vol.12



Vol.11



Vol.13

【お問合せ】→メールアドレス post@sawayakazaidan.or.jp TEL (03) 5470-7751

ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

(敬称略) (2020年8月1日～8月31日財団受付分) ※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日にずれが出て掲載時期がずれる場合がありますご了承ください。

さわやかパートナー個人(60件)

(都道府県別50音順)

北海道	埼玉県
小笠原 一造	石川 晶一
小田 桂子	千葉県
澤出 桃姫子	石井 敏夫
竹腰 久留美	伊藤 實
秋田県	関 義信
丹羽 誠	外山 慶範
福島県	中戸 幹郎
佐藤 俊子	東京都
茨城県	池崎 芳博
津田 敬子	石井 孝彦
渡辺 英勇	伊東 雅子
群馬県	岩田 典子
木村 隆彦	石見 光夫
	神奈川県
	内田 友昭
	江藤 純子
	奥山 充
	古賀 啓子
	高久 銀二郎
	谷口 浩章
	藤井 宏昌

さわやかパートナー法人(15件)

(50音順)

花王株式会社	花王株式会社
かながわ信用金庫	ボランティアサークル「ふれあい」
認定NPO法人きらりびとみやしろ	株式会社公文教育研究会
NPO法人さわやかさばえボランティア虹	JCRファーマ株式会社
医療法人財団俊陽会古川病院	初山別村
株式会社シンソーワ	住友生命保険相互会社
認定NPO法人東葛市民後見人の会	東京海上日動火災保険株式会社

山田 哲夫	岐阜県	愛知県	大阪府	岡山県	井上 稔信
山本 千恵	遠藤 伸子	大橋 道彦	藤田 宣子	梶田 弘	岩城 勝正
湯山 みはる	坂口 正恭	丹下 多榮美	和田 裕	香川 県	小柳 真澄
新潟県	山下 紘一	京都府	兵庫 県	行成 輝見	坂田 美代
佐藤 英夫	静岡県	大江 薫子	多田 睦美	高知 県	
長野 県	稲葉 ゆり子	片山 千香子	名倉 啓恵	永井 美保	
竜野 泰一	水野 光江	中村 純三	安田 隆行	福岡 県	

日本印刷株式会社
浜名湖電装株式会社
株式会社ランドビジネス

一般で寄付（1件）

匿名希望（5千円）

（50音順）

地域助け合い基金で寄付（9件）

（ご寄付日付順）

飯田 英男（10万円）
片山 順子（5万円）
山田 勝典（1万円）
中川 涌一（10万円）
日本生活協同組合連合会（10万円）
匿名希望（3万円）
匿名希望（3万円）
箱の浦自治会まちづくり協議会（5千円）
イワナ ユリ（1万円）



いきがい・助け合いサミット in 大阪

『助け合い大全'19』

昨年9月に開催した「いきがい・助け合いサミット in 大阪」のすべてを収録した『助け合い大全'19』です。

サミットでの全体シンポジウムと各分科会における発言要旨をまとめた『パネル編』、ポスターセッション出展の全作品を掲載した『ポスター編』、そして『提言編』を3冊セットで頒布しています。助け合い活動、「お互いさま」の共生社会づくりに、ぜひお役立てください！

お申し込みは当財団まで → mail@sawayakazaidan.or.jp

1セット2,000円（税込み）送料別途 ※3冊セットのみでの頒布となります。

【助け合い大全'19 提言編 目次】

- いきがい・助け合いサミット in 大阪の意義と特徴
- 全体シンポジウム発言要旨
- 分科会1～54
提言／登壇者／議事要旨
- ポスター展
- いきがい・助け合いサミット in 大阪を振り返って



ポスター編



提言編



パネル編

さわやか活動日記(抄)

〈2020年8月1日～8月31日〉

社会参加推進事業

社会人地域参加推進プロジェクト

高連協 2019年度

事業報告

定時総会を開催

〔8月25日〕

高齢社会NGO連携協議会2019年度事業報告定時総会が、東京都港区のメルパルク東京で開催された。総会開催に先立ち11時より当財団会議室にて役員会を開催した。総会では、堀田力共同

代表は欠席したが、樋口恵子共同代表出席の下、個人会員4名のほか、全24団体中9団体が参加、15団体が委任状を提出し総会が成立。決議・承認事項として、第1号議案：19年度事業報告、第2号議案：19年度決算承認の件、第3号議案：役員改選の件が提出され、いずれも全員一致で承認された。第3号議案においては、現役員全員の重任と新たに、大上真一氏（一般財団法人長寿社会開発センター）、

坂林哲雄氏（日本高齢者生活協同組合連合会）、森義博氏（公益財団法人ダイヤ高齢社会研究財団）の3名の新任が承認された。今回は、コロナ対応として高連協で初めてのZoom会議の併用を実施し、4会員がテレビ会議での参加となった。今後はZoom利用による会議への参加団体拡大とウェブ（ホームページ）での会員連携強化につなげたい。

（玉置）

所り 事だより

●大阪サミット開催から1年が経過した。今年は残念ながら延期となったが、来年の神奈川サミットはコロナ禍がなかなか収束しない中、どのように開催できるか検討中。サミットが参加者の皆さんはじめ関係者にとっても有意義になるように頑張ろう！ 皆さん、どうぞよろしく願います。

ご遺贈寄付のご報告

基金として活用させていただきます

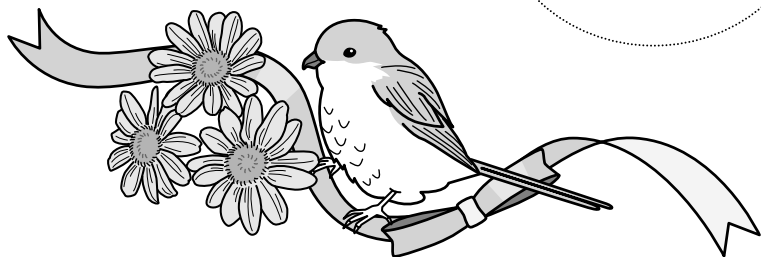
故安田夢栄子様

かねてよりさわやか福祉財団の活動にご理解をお寄せくださっていた安田夢栄様様が、本年3月11日に88歳でご逝去されました。ご遺言によりご資産を当財団へ包括遺贈してくださいました。

生前は公衆衛生に関わるお仕事をされていて、手芸がご趣味で人に教えていたこともあったこと、お母様が100歳まで生きておられたので、自分も100歳まで生きるとお話されていたとうかがっています。

故安田様の温かいお志に感謝いたしますとともに、ご遺産は今後お名前を冠した基金として当財団の活動に大切に活用させていただきます。（森 中村）

みんなの広場



お互い、頑張りましょう



生活支援コーディネーターを務めた4年余りの間、『さあ、言おう』『さあ、やろう』に勇気をもらい活動することができました。実績として、住民同士の支え合い「もり移動支援調整センター」が設立できたことは、とりわけさわやか福祉財団の皆様のご支援があったからと感じております。今後は、今までの経験を踏まえ、住み続けられる地域づくり、まちづくりをしていきたいと考えています。

経験を生かして
地域づくり、まちづくりを

高野 一利さん 66歳

静岡県

『さあ、言おう』は、皆様の声を社会につなげる
問題提起型情報誌です。ぜひ、ご意見をお寄せください。

投稿募集

本誌で取り上げたテーマへのご意見
・ご感想、人生100年時代の生き方、
ボランティア活動等のエピソードな
どをお待ちしています！

*添付の投稿ハガキや投稿用箋などをど
うぞご活用ください。

*掲載にあたっては、誌面の都合により
編集要約させていただく場合がありま
すので、あらかじめご了承ください。

送付先

〒105-0011 東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
公益財団法人さわやか福祉財団『さあ、言おう』編集部宛
FAX:(03) 5470-7755 E-mail:pr@sawayakazaidan.or.jp



Tsutomu Hotta

私たちはふれあいあふれた地域づくりを支援しています

さわやか福祉財団の活動をぜひご支援ください。

『さあ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さあ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人
年会費

Aコース 10,000円

Bコース 3,000円

法人
年会費
(1口)

Aコース 100,000円

Bコース 20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の控除対象となります。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の控除対象となります（所得税の寄付控除額の上限は所得の40%－2000円）。

一般ご寄付を
いただく場合の
お振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856※

三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金 口座番号1174297

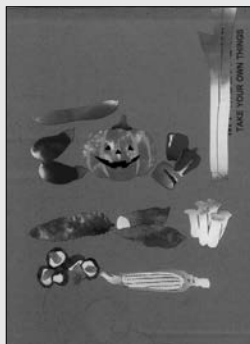
※手数料不要の専用用紙をご用意していますのでお申し出いただければご郵送します。

*いずれもお問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。(mail@sawayakazaidan.or.jp)

表紙絵から

はり絵・池田げんえい

「夏野菜の皆さん、
楽しませてもらって
ありがとう。」



編集後記 ●「共感」と「寄り添い」、相手を心から思う支援について理事長が書いています（P2～「巻頭言」）。●「コロナ禍を乗り越えて共生社会へ」では、コロナ禍でもつながりを切らないための工夫、埼玉県内の取り組みをまとめました（P4～）。●「活動の現場から」は佐賀県嬉野市。いろいろな立場の人や団体が、一緒に高齢者のいきがいを創出しました（P14～）。●「地域助け合い基金」は、支援する地域を選んでいただける基金です。地域の助け合いを広げるためにご支援をお願いいたします（P9・裏表紙）。

助け合いを
広げよう!

新
ひとりごと

澤岡
詩野

コロナで4月末からはじまった

子どもの登園自粛と私の在宅勤務。

早朝と夜中に仕事、昼は公園や公的な場に連れ出せない

子どもとの終わりの見えない毎日にボロボロ。

そんな毎日を救ってくれたのは、

散歩や買い物で声をかけてくれるご近所さん。

それと我が家の玄関先に置いた本棚「みんなの図書館」に

本を提供してくれたたり、借りにくる地元の誰かの笑顔と感謝の言葉。

もしかしたら、こんなゆるやかなツナガリを

大事にすることが「新たな生活様式」?

公共や大きな団体が生活の場である地域を動かす時代ではない?

今こそ、一人一人が撒くゆるやかなツナガリのタネを見つけ出し、

一緒に地域のチカラにしていきませんか?



●公益財団法人ダイヤ高齢社会研究財団主任研究員

幼い頃からのつながり下手がキッカケで、ゆるやかな人間関係を追求する研究者に。

さあ、10月号

通巻326号 2020年10月10日発行
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい
イラスト すずきひさこ
福島康子

レイアウト 菊池ゆかり

印刷所 日本印刷株式会社

発行人 清水肇子
発行元 公益財団法人さわか福祉財団
〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp
<https://www.sawayakazaidan.or.jp>
Printed in Japan

無断複写・無断転載はご遠慮ください©

つながろう、心で 広げよう、笑顔の助け合い!

「地域助け合い基金」で コロナ禍を乗り越えて共生社会へ

ぜひご寄付をお願いいたします。

皆様からのご寄付が地域の助け合い活動を育みます。

(「地域助け合い基金」の詳細については、本文9ページをご覧ください)



【ご寄付の方法】

● 銀行振込によるご寄付

三井住友銀行 浜松町支店 (普通)口座番号 7859452

三菱UFJ銀行 浜松町支店 (普通)口座番号 0095446

(口座名義※いずれも同様)

公益財団法人さわやか福祉財団 地域助け合い基金

銀行お振り込みの場合は、送金者の情報がカタカナ表記のお名前のみとなるため、当財団発行の領収書が必要な場合や地域の指定をご希望の場合は、お手数ですが「寄付申込書」(ホームページご参照)を当財団宛お送りください。当財団へのお電話でも承ります。

● 郵便振替によるご寄付

(口座記号番号) 00110-7-709627

(加入者名) 公益財団法人さわやか福祉財団

【感謝状】

※通信欄に、ご指定がある場合の市区町村名(区は東京都の特別区)と、一言応援コメントなどをご記入ください。

※手数料不要の振込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。



税制上の優遇措置があります

さわやか福祉財団にいただいたご寄付は、税制上の優遇措置の対象となります。個人の皆様には、所得控除または税額控除を選択いただけます。法人の皆様には、所定の算式に基づき、寄付金額が当該事業年度の損金に算入いただけます。いずれも、当財団発行の領収書が必要となります。詳しくは最寄りの税務署または当財団宛お問い合わせください。